

〔発言者〕 山本和明

〔発言年月日〕 1971 年

〔生年、被爆地、職業など〕 長崎で被爆。

〔内容〕

私は、友人の遺体発掘のため行った学校には、それからは二度と訪れる気持になれず、原爆の事そのものを忘れようと思って、二十六年間、行かなかった。

しかし、このたび『長崎の証言』という本を読み、われわれ被爆者はもう一度、原点に戻り、証言として残すものは残し、被爆者の援護と救済を、政府に向って、声を大にして叫ばなくてはいかぬと思った。

〔注〕

『長崎の証言』に収録された一被爆者の言葉。1960 年代後半から始まった『長崎の証言』に代表される証言運動によって、重い口を開き、体験を語り出す被爆者がでてきた。辛い体験を思い出したくない、と口を閉ざす被爆者も多い中で、『長崎の証言』は、これまで被爆体験を語ることのなかった被爆者の言葉を掘り起こすきっかけの一つとなり、現在に至るまで多くの被爆者の言葉を収録し続けている。

(『長崎の証言 1971』、長崎の証言刊行委員会編、1971 所収)